

電話線

そこはたぶん
寂れた北の僻村で
海へといたる藁色の原野の中に
葉を落とし斜めにかしいた樹幹を晒す
化石林のような一叢の灌木に囲まれて
北の岸辺を打つ冬の寒風から
わずかに守られ消え残った集落
半ば痕跡のような集落だろう

タール塗りの板塀の
隙間からのぞくススキの穂
海風に向かって吊るされた
わずかばかりの乾鰯が
唐突な冬の到来に
白い衣をまとい
身をふるわせているだろうか

原野と畑地をへだてる境界の杭が
久しい以前に放棄された
一本の判読し難い道標と共に
風を切ってびょうと鳴る

その村の
原野の彼方にかすんで消える
降り初めの雪の舞う白い街道を
ひとりのやせた男が歩いている

その晩
いつもの時刻に無言電話を受けた後
消灯したままの暗い部屋で
タバコの先に火を灯し
そんな景色を思い浮かべた

その村の
破れかけた破風屋根からも
一本の電話線が延びており
風がたどる幾つもの丘を越え

暗い水面に一瞬映じる雪片と共に
幾つもの川を渡り
昨日も明日も見知らぬままであろう
多くの人の住む町をへて
この都市の片隅にある
私の部屋にも繋がっている

その道程が経たであらう
無数の見知らぬ風光
たとえばとある凍れ夜
茫洋とうねる海岸草原に
星の光に照らされて
ぼつねんと立つ
一本の電柱
流れ星がひとつ
暗い夜空をよぎっていった
あの丘の向こうの
小さな街灯りの片隅で
冷たい夜風を帆に受けていく
遥かな岸辺の波打ち際で 幾多の者が
灰の灰
塵の塵たるものに
祈りを捧げる一刻

電話の主は
黙したまま何も語らなかった ただ
遠く微かに
風の音が
聞こえていたような気がする